

この船は「橘高丸」で船主の名は橘さんとだけ覚えていたが、年齢はその当時五十五歳ぐらいたった。船を下りて港に出張していた引揚援護局から引揚証明書と無賃乗車券の交付を受け、東京行きの列車に乗り、二日目の午後、東北本線に乗るために山手線に乗り換えて上野で下車する時、大変な混雑で吉田堅哉さんを見失い、三十分ほどホームで待っていたが遂に会うことが出来なかった。

昭和十九年二月より北支、中支、南支と転戦して、満州、北鮮で終戦、ソ連軍から逃れ東京まで二カ年、幾多の死線を越えて生死を共にして来た無二の親友を遂に失った。常に一緒にいたので、お互いに確かな住所も知らずに捜すすべも無いまま現在消息不明、ある新聞の尋ね人欄に掲載を依頼したが、存命で何らかの情報を得られるか期待している次第である。

奇跡は二度と起こらないというジンクスはあるが、偶然の連絡で生還を得られた私は、九死に一生を賭けた一度の奇跡か、神仏の加護か、命拾いの偶然は、伝

馬船を拾う、対馬海峡の暴風、掃海艇との出会い、無謀な我が船長、タマ丸の轟沈、以上五回の偶然がなければ逃亡成功の終わりは無かったと思う。

北鮮からの逃亡六十余日、その半分は悪夢の毎日、死の恐怖に怯えながら逃げ、十月二十日夜、我が家の玄関に入ることが出来た。ソ連に捕らえられ、シベリアの凍土と化している多数の戦友を思いご冥福を祈る日々であり、奇しき運命の流れに無量を感じる。

吾れ三度・国家の干城となる

愛知県 近藤 蔵 一

私は大正三年八月十五日長男として生を受け、姉と妹の三人兄弟であった。その年は内外共に多事多難な年で、内では山本権兵衛内閣が総辞職し、第二次大隈重信内閣が組閣し、西洋においては、第一次世界大戦の火蓋が切られた。

家業は農業で、生活状態は中程度だった。濃尾平野を流れる三大河川の木曾川・揖斐川・長良川、ここに幾多の支流が合流する。佐織は日光川・目比川が合流する三角地帯で、地味豊饒な穀倉地帯で農業には最適で、人情味豊かで長閑な田園地帯である。太古弥生時代からの古墳など考古学の興味深い話題も多く、また戦国乱世の終止符を打った時の覇者・織田信長公は天文三（一五三四）年に勝幡城で呱呱の声をあげたという由緒ある郷土でもある。

私は自然環境にも恵まれ、無心に遊び、すくすくと成長し義務教育の小学校を卒業し、農学校に進学を希望したが、父親から技術者になったら自分の後継者が絶えると反対され、家業を手伝いながら速算学校に通学し、同校卒業後は郡役所（現・県地方事務所）に就職して農業技術を習得することとなった。

また、一方で稲沢農業学校（現・稲沢高校）の卒業生などと共に村内に農友会を発足させ、農業技術の研鑽・先進地域への視察・実地研修などを行い、当時としては珍しい農村青年会の活発な活動を行った。私は

推されて会長を務め、若者同志の勉学・研鑽に励んだ。

当時、青年学校が校区単位で全国的に出来、教官は退役将校、指導係は退役下士官で、私は指導員助手を拜命した。教科内容は社会科全般と内外政策・特に重点教育は軍人としての基礎知識だった。

昭和六年、満州事変勃発、翌年満州国建国、さらに翌々年日本は国際連盟を脱退するなど、国際的關係が緊迫化、国家総力戦、体制構築という時代に突入した。

日本国民男子として生まれたら必ず兵役の義務があり、昭和九年夏に小学校で徴兵検査、幼なじみ等と同道して検査会場へ入る。諸検査を終えて、各人ごとに徴兵執行官の前に立つ。私は、「近藤蔵一、甲種合格」と褒められた声で呼び上げられた。私は謹んで復唱し、日本男子の本懐と喜んで帰宅した。日を経て役場の兵事係が来宅し「近藤蔵一さん、歩兵科に決定ですよ」と告げられた。歩兵科なら私の望む所、青年学校で充分鍛えているから大丈夫と思いい、ヤレヤレと安堵し

た。

実のところどこに決定するか、ちょっと心配だった。海軍だったら困ったなあと思案していた。陸軍は歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重と大別して五兵科に分かれていた。歩兵なら名古屋の第六連隊か、岐阜の第六十一連隊か、それとも静岡の第三十四連隊かなあと心の中で一人決めていた。

確か十月の中旬に役場の兵事係が来て、「近藤蔵一さん、近衛歩兵第四連隊に十二月九日入営です」と告げた。家族をはじめ親戚、知人友人はみんなびっくりしていたが、当の本人、私が一番驚いた。近衛兵は日本全国の選抜軍人で、思想堅固・身体強健・品行方正に加えて財産・教養・一家同族に罪科者なしの青年のみ入営出来る軍人最高の名誉で、家門の誉れと先祖の御仏に報告し、氏神様に参拝しその日に備えた。

昭和九年十二月八日には家の前に大きな幟が立てられ「祝・近衛歩兵連隊入営 近藤蔵一君」と大書してあった。親戚や友人など多くの方々の万歳の声と日の丸の旗の波の中を出発し、近衛歩兵第四連隊（東京青

山）へ十二月九日無事入隊した。第五中隊に服務が決まり、中隊長の自分たち初年兵への訓示は「貴様達は榮譽ある近衛歩兵だ。全国六十余州の代表だ。勤務に精励せよ」だった。教育係将校・教育係下士官・同助手として古参上等兵が紹介され、いよいよ本格的訓練が始まった。覚悟はしていたが決して生易しいものではなかった。その訓練たるやまさに忍耐の一語に尽きた。自分はおかげで同月十五日には青年訓練修了者の検定に合格した。

翌年三月十三日第一期の検閲も修了し、二等兵ながら軍人として認められ、禁闕守衛の任にあたることとなった。四月九日には満州国皇帝陛下、御来朝の^{おん}砌、近衛師団觀兵式に参加し、参加章を拝受した。

六月一日付にて歩兵一等兵に進級し、同年十二月一日歩兵上等兵に、そして翌二日には伍長勤務上等兵（後の兵長）と僅か一日だけの上等兵であった。一生懸命に励んだお陰で常に第一選抜で進級した。

翌年昭和十一年二月二十六日、この日からの数日間

は、自分にとっては忘れることの出来ない日々だ。
二・二六事件である。

そのとき我が中隊は他中隊と合同演習のために栃木県西那須野の金丸廠舎にいた。早朝から雪の降り積もる中を、匍匐・早駆け前進、止射撃訓練などを行っていた。十一時ごろ連隊長・原田熊吉大佐が来られ、我々の訓練状況を視察され、引き続き第六中隊視察へと進まねんとした時、突然連隊副官が馬を飛ばして来られ、連隊長に何事か報告された。伝令が走る、各中隊長に重大命令が出たようだった。訓練中止の喇叭が鳴り響き全隊は廠舎に早駆けで帰舎した。自分たちには詳細不明のまま、次なる命令を待ただけだった。

中隊長・山下大尉は各分隊長以上に集合を命じ、直ちに帰営するとの命令のみだった。武装を整え、いざ出発という直前に「実弾を渡す」と発表された。非常事態だということは察知出来た。午後三時ごろ金丸廠舎を後にして駅に到着した。そこには早くも軍用列車がホームに待ち構えていた。「全員乗車」との達しの声。途中、喇叭でいつでも下車出来る体勢で車内待機

の姿勢だった。

日はとつぷり暮れて列車は止まった。新宿駅のホームからは遙か手前の線路上に「全員下車」だった。この時点で解った事は一部の陸軍部隊が反乱を起こしたとのことだった。常時の新宿付近は夜でも賑わいがあるのに、不気味なほど静かであったことを今も鮮明に記憶している。非常配備戦設行軍にて約一時間半行軍の後兵営に到着。夜半過ぎに早速入浴を済ませ、真新しい禪を締め、出陣命令を待ただけだった。

翌二十七日、小雪のちらつく朝を迎えた。腹ごしらえも十分に銃器の点検整備を完了。午後三時出動命令が下る。第一線部隊として小羽大隊（三〇〇人程度）の下で出動した。軍装は第一軍を着用、携帯食糧二日分、我々は小銃実包（弾）、分隊長は拳銃実包をそれぞれ受領し、中隊長は抜刀して先陣に立ち進軍喇叭吹奏、麴町・永田町一帯の警備に就いた。

ちなみに、当時の部隊編成及び直属上官は近衛師団長橋本中将、第二団長大島少将、近衛歩兵第四連隊長原田熊吉大佐、第二大隊長丸山少佐（ただし、実質的

には第二大隊の内第一線部隊が独立したため、自分の直屬上官は小羽少佐)であつた。近藤分隊は山下中隊長の護衛を務めた。

麴町付近の万平ホテル南部の警戒にあたり、医学校に主力を置いて警戒任務に就いた。午後十時ごろ第一線部隊に土のう運搬を命ぜられ、早速工事についた。

明けて二十八日、早朝より小雪が舞い降る中を任地に待機していた。反乱軍は充分堅固な陣地で、銃眼から銃口を覗かせて、いつでも射撃出来る態勢を整えている。

勅命が下つた。「謹ンデ勅令ニ従ヒ、武器ヲ捨テ我方ニ来レ、惑ハズ直グ来レ」。また、飛行機より「下士官兵ニ告グ 一、今カラデモ遅クナイカラ原隊へ帰レ 二、抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル 三、オ前達ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテオルゾ」と。

勅命が出たからには、友軍に非ず、全員敵である。敵軍は二重橋前に全員集合した。そして「天皇陛下万歳」と三唱、その後原隊へ帰ると思つたら、また元の

国会議事堂付近に集結し、戦線に復した。

午後七時ごろ、敵の将校らしい人物が我が陣地偵察に来たとの噂を聞き、緊張感が高まり、周囲の道路には重機関銃、軽機関銃を配備し、敵重な警戒をした。

後方の万平ホテルには看護婦さんたちが待機していた。その近くには、白木の棺が置いてあつた。「あの棺は一体なんだろう」と問えば「あの棺は我々が入る棺だ」とのことだつた。何か背筋がぞくつとするような思いがした。間もなく合言葉が秘密裡に発せられた。「原田(連隊長)」「小羽(大隊長)」である。

いよいよの時期、時間である。その夜のことであつた。翌日反乱軍に対して攻撃を行うことが周知徹底されるとともに、中隊長から「親に何か言い残すことはないか」と言われ、さらに封筒を取り出されて「頭髮と爪、そしていい残す事があれば、これ(封筒)に同封せよ」とのことであつた。自分は血気盛んではあつたが、死に対する実感がわかかなかつた。ただ中隊長の言葉を受けて、やるせない心持だつた。「お父さん、お母さん、お先に行きます。誠に申し訳ありません。

御国のためです。分隊長として死するのは本懐です」という思いを、心の中で何度もつぶやきながら郷里の方に向かって拝礼した。そのとき自分の脳裏をよぎったのは、学校の時に習った「親思ふ、心に勝る親心 今日のおとづれ何と聞くらん」という歌であった。

同じ菊花の御紋章をいただいた銃器で戦火を交えねばならないという不条理を感じざるをえなかった。反乱軍は、依然勅命に従う気配すらなかった。午前八時ごろだった。いよいよ青釣星を合図に攻撃、前進の命令が下った。ちなみに「青釣星」は青色花火で攻撃前進の合図で、今一つ「赤釣星」というのは射撃開始の合図。我が近藤分隊は、中隊の中心に配置し、山下中隊長の護衛に任じた。

左翼から近衛第三連隊が前進している。我々の目的地は国会議事堂であった。我が近藤分隊は中隊長の前面に立って自分は一番先陣で拳銃一丁を手にしつつ進む。軽機関銃勢は自分の後について来る。「赤釣星」を待つばかりの態勢が出来た。その時に、前方議事堂より、白たすきを十文字に掛け、手には白い軍手をは

め、軍刀の柄を白帯で巻いた敵将一人が足早に近藤分隊の前に来た。自分に向かって「将校はいるか」と問う。自分は「すぐ後に中隊長殿がおられる」と回答した。その後しばらくの間、中隊長と反乱軍将校との問答があったが、自分は前方に全神経集中していたから内容不明。

しばらく時が流れ、中隊長から「攻撃中止」の命令が出た。有線電話で後方と連絡を取り合っていた。その連絡内容を要約すると、「反乱軍将校は自決、兵は原隊に復帰する。ゆえに攻撃中止せよ」だった。自分はその瞬間、今まで張りつめた緊張の糸が切れたかのように両方の肩の力が抜けた。「ホッ」としたのが実感だった。菊の紋章のついた銃で同じ日本人同士で殺し合わずに済んだという安堵感もあり、なんとも言えぬ複雑な心境だった。しばらくして、後方へ退れと命令が下り、元の地点まで帰った。

反乱軍の最高指揮官・野中大尉は、陸軍大臣官邸において自決したとの報が入った。我々は白木の棺が送られたのを見届けて、原隊へ帰った。既に時計の針は

午前一時をさしており、三月一日に日付は変わっていた。

翌三月二日、近歩三の修養兵の監視長として自分と竹村伍長がその任にあたった。修養兵とは歩兵第三連隊の兵隊のこと。監視長とは、文字通り彼等が再度反乱を起こさないように監視する役目である。具体的には、種々な質問を通じて、彼等の心境がいかなる状況・状態にあるかを調べ、良と反応すればそれで終了。やや不良では安定度なく再調査を要すで、この場合は赤印を付し、再度調査ということだった。

三月三日より、御守衛として宮城に再度服務することとなった。自分は下士官代理及び歩哨掛に任ぜられた。歩哨掛というのは、簡単にいえば営門などの警戒・監視の任にあたる役職である。しかし、再度宮城に服務といっても、歩哨掛につくのは初めてのことであり、いろいろ覚えることが多かった。初日は三笠宮殿下（青山御所内）に服務した。いささか緊張したが、実際に服務してみると、垣間見る殿下のご家庭は実に質素な御様子であった。御所内には桑畑があり、

養蚕を行われた様子があり、実に学ぶべきことが多かった。また自分たち兵隊に対して、殿下は大変お心配り下さり、我々は御馳走を頂戴し、さらにお菓子まで頂戴した。涙がでるほど感動したことは言うまでもない。感謝の意をこめ、気を引き締めて再度御守衛の任務に服した。

その日の感動を親に伝えたく、殿下から頂戴したお菓子の包み紙に、その日の出来事を綴り郷里へ便りをした。数日後、上野に故郷の古瀬から前野光国さんが面会に来て「君の御両親から預かって来た」とお金五円を渡された。当特別段金銭に不自由していたわけではないのに、いかなる理由からか、不可解であった。そのいささつたるや、青山御所三笠宮殿下から頂戴したお菓子の包み紙で手紙を出した。両親は包み紙のことを便箋も買ひ金が無く困っていると思った由、後で大笑いした。

以来、自分は毎日御守衛番を務め、宮城・大宮御所・各宮家の守衛に任じた。二重橋・鉄門・坂下門など数カ所が主な任地であった。任務を交替するとき

に、各地より参拝に来る人びとの姿を高い所から見ると、各地より参拝に来る人びとの姿を高い所から見た時にあらためて任務の重大さを認識せざるを得なかった。

六月三日、特別恩賜金二円五〇銭を頂戴した。六月十日帰休を頂戴し故郷へ帰る。休暇も終わって原隊へ復し、勤務に精励し、同年十一月十八日に満期除隊という事で郷里に帰った。

回想するに二・二六事件は苦しかった。

昭和十五年六月十日、臨時召集令状が来た(世にいう赤紙)。再度軍務に服せることは当時としては喜びだった。多くの人に見送られ東京へ向かった。近衛歩兵第三連隊第五中隊に配属された。このたびは外地出征だった。中国大陸の戦線は拡大し、全国の各師団が外地に出征して激戦中である。近衛歩兵も出陣し、その範たれというところだった。代々木練兵場において出陣式が挙行された。連隊長訓示「選ばれ禁闕守衛の任を恭し、出陣の天命を押し何たる光榮ぞや、男子の本懐之に過ぐるものなし」の言葉だった。

二・二六事件以来の出征ということで、全将兵の意気高く、一致団結をもってこの大任を完うしようと思つた。

六月十九日、天皇陛下の御親閲を第一旅団の宮庭にて受けた。出征に対する御親閲は他の連隊では無かつたので、士気ますます盛んとなった。同月二十七日、自分は連隊本部付下士官となり、直下軍旗小隊金田少尉のもと分隊長として戦地へと出発した。

日の丸と万歳の声に送られ、芝浦港から乗船出帆し外洋へと向かう。波穏やかな一夜を過ごし、早朝に目覚め、船員にどこかと問う。彼「現在、紀伊半島の大王崎沖です」と答える。「ああ、あの方向に古瀬(故郷)があるのだなあ」。二度と再び生きて故郷に戻ることなきやもといろいろな思いが胸中を去来した。一人静かに心からお別れを申し上げた。

午後三時ごろ全員甲板に集合を命ぜられた。整列すると連隊長は「祖国に別れを告げる時が来た。天皇陛下の彌栄を願ひ、遙拝申し上げる」と。佩刀者(はしろう)抜刀し着剣(さくけん)棒銃で喇叭「君が代」が吹奏された。波の間に聞

に祖国が見え、いよいよ日本との別れと思うとちょっと感傷にひたつた。

七月七日、中国大陸揚子江に上陸。付近の警備にいたが大陸の夏は暑かった。日本の猛暑の比に非ず。

偽装網（鉄帽や上半身に着る網）につけた木の小枝や草が、三里ほど（十二キロメートル）歩くうちに、青枯れて、手で揉むと粉々になって散ったほどだった。

日本では想像出来ない暑さだ。この猛暑のために、脱水状態になり、不運にも三人の死者が出た。同月二十日広克蟄に上陸した。引き続き南察察県に入り、八月五日扶南県に入り、仏印作戦に参加した。この時初めて現地人と会話した。言葉は違っても意思は通じることを知った。

九月三十日より南寧撤去作戦に参加した。扶南県は忘れられない土地である。確か十月六日と記憶する。

この日の戦闘は強力な敵に遭遇した。根竹州付近だった。陣頭指揮を執っていた自分に集中して敵弾が飛来した。不覚にも一発の銃弾が左大腿部を貫通した。丸太棒で足を殴られたような感じで後方に倒れた。部下

が「分隊長大丈夫ですか」と駆け寄り、三角巾で太股より飛び出ている血汐の上を強く縛ってくれた。「なに、かすり傷だ」と言ったが、立ち上がる事が出来なかった（現在も傷跡あり）。幸いに生命に別状なく、同月八日南寧野戦病院に収容された。ちなみにこの戦闘で宮下中隊長と小隊長が負傷し、分隊長代理の館野兵長が指揮を執り作戦を続行したが、受けた打撃は大だった。

キンドン湾で敵前上陸用の鉄舟に乗り病院船「シャトル丸」（三〇〇トン級）に横付けした。この間波に傷口を濡らさぬように細心に注意された。病院船からクレーンが降りて来て、四人ずつが同時に釣り上げられて乗船した。船室は一般兵は雑魚寝の状態だった。下士官以上は特別室だった。菊花の御紋章入りの煙草を頂戴しありがたく別天地にいるような心持ちだった。

心に少し余裕ができた時、今ごろ我が分隊はどうなっているだろうかと気になって仕方がなかった。軍医さんが「今は負傷を治すが国のためです」と言ってく

れた。少しは気が休まったが、でも心配だった。同月二十九日、台湾高雄に入港上陸し、陸軍病院高雄分院に収容され、療養にあたった。

十一月、内地送還のため基隆港を出航し広島港に上陸、広島陸軍病院に収容された。療養効を奏し、松葉杖で歩行が可能までになった。同月九日金沢陸軍病院に移送され、十二月二十四日には治癒して退院した。そして原隊復帰命令で近歩三に帰隊した。その途中名古屋にて一時下車して親類、縁者に迎えられ一夜を共にして翌早朝青山連隊へ帰隊した。中告を終わって、病院下番ということで少しのんきにやっていた。一月十五日付にて召集解除になり、名古屋目指して一目散に帰郷した。

大東亜戦争の戦線は日増しに拡大し、大変なことになったと思った。近衛兵上がりの在郷軍人として充分に郷土のために働いていた。

日本の旗色が悪くなった昭和十九年八月五日、臨時召集令状が来た。昭和十一年現役満期・昭和十六年召

集解除とそれぞれ、中三カ年半で召集が来た。一度は普通で二度は稀で三度目は何とこのだろうか。今度は、中部第二部隊の勝隊付だった。その後「秀第五十七部隊」に編入され、第二隊付となり、主に陣地構築のため工業学校において材料運搬の勤務に従事した。また第二部隊へ帰り初年兵教育を行ったり、衛兵司令・週番下士官などを務め、翌年一月には師団司令部の衛兵司令防空監視長として服務した。

一月三日、師団長閣下・参謀・副官などが集まり、三、四メートル四方の地図（超特大）を前に広げて、敵B29の襲撃対策を検討中だった。すると「只今、B29が琵琶湖付近を通過、問もなく関ヶ原を東南進中」云々というラジオ通報が入った。と、ほとんど同時に監視員の原上等兵から「監視長殿、O時の方向敵機編隊確認」に、見上げれば四十五度の角度で敵機が来襲してきた。危険を察知し師団長閣下にその旨報告した。閣下は用の無い者は下にさがれと言われた。自分の外に原上等兵と通信兵を残し全員退去させた。西方名古屋市西區方向（菊月町・明道町）連隊区・砲兵隊

周辺が轟音と共に黒煙が立ち上り一面火の海と化した。

早速、師団司令部から「状況報告せよ」と来た。自分は黒煙の中で片手にマイクを持ち、敵機は先頭の指揮官機らしいのが隊列を離れ、黒煙を吐きながら墜落の様様でありますと報告した。空襲の状況は直面した者でないとは理解に苦しむだろう。光景は惨憺たるものだった。

その後も初年兵や幹部候補生・特別幹候生などの教育に勤務し、後、経理部へ編入された。そのころの日本は南方からの石油の輸送も途絶えて、機関用の燃料確保のために全力を集中していた。例えば松根油・菜種油などなんでも油が人用だった。経理部はそのような物品を調達するのが任務であるために、自分に松根油工場建設を敵命され、岐阜県武儀郡神洞村において松根油工場建設に取り組んだ。もちろん技術習得のため豊橋で勉強してきた。

工場建設に当たり、住民の理解と協力を得るために村長・区長・実行組合等の方々と会合を重ねて建設で

きた。もちろん農家の繁忙時には地域の農作業の手伝いもした結果、この工場は東海地域でも最大の製油工場が出来、毎日多量の松根油を製造発送した。

山の中で古い松の根っこを掘り起こして、工場に運び、割り砕いて釜で蒸留して油を抽出して出来る。このような作業を一生懸命やっていたら知らぬ間に終戦だった。

私の軍隊生活は昭和九年に始まり、終戦まで実に長い年月だった。今は平和を満喫中である。